

老齡者孤独のソルフエジユ (solfégio)

——老令者の情動性管理のこころみ・その二——

山 口 信 治

はじめに

I 前回のあらましとその考察から

II 本調査研究における諸限定

限定の1 わが国における現代の老人問題の研究

2 大衆化社会の現況下における老令者パーソナリティの形成に 関する調査研究

3 老令中・後期の老人の問題

4 情動性管理に関する研究

III 情動性管理方式の方法論的論述

IV 結果の概要

V 考察

おわりに

はじめに

今回、発表の機会をえた報告はすでに「厚生指標」第16巻3号（昭和44年3月）に掲載した論文「老令者の孤独……ティラー氏の不安テストを用いた老令者の情動性管理のこころみ」……の第2報ということになる。

第1報では、老化 (aging process) に伴って起こる様々な不安定な情動を長期にわたって観察することを試み、しかもその観察をとおして老令者の情動 (emotion) と解釈されている人格的な心のうごきを、エモショナル・インベントリー (emotional inventory) を使って、凡そその変化を数量化し、しかもそのプロット (plot) が情動性変動の許容範囲にとどまっているか、それとも許容範囲外にはみ出しているかを計測しながら情動の管理を試み、強いては安定性をはかろうとするものである。

従来、老令者用に作られたパーソナリティ・テストも決してその数の上では少くはないが、インベントリーを使って長期に老令者の特性を管理するといった手法は、限られた筆者の蒐集した参考資料からは凡そ皆無と言える。しかるに、その意味では極めてユニークな研究と言えるし、老人の福祉事業を進めるための指標ともなりうるとおもう。

幸い、東京で開催された第10回日本老年社会科学会（昭和43.11.）での学会発表や、つづいて学会発表のレジメともいうべき先に述べた「厚生指標」への投稿をつうじて、有意義なたくさんさんの質問や感想ならびに批評といったものを受けた。

そこで、各方面の関係者諸氏から寄せられた指摘のうち、特にそれを内容別に類別してみると凡そ次のようになるかともおもう。

即ち指摘の第1点は、基本的には調査法の問題指摘で、まずサンプルの問題であり、特定地域から抽出したために生ずるバイアスの問題である。しかも有意抽出による偏傾の問題であった。第2点は、しからばはじめからバイアスを予想しながらも特定地域に設定し、しかも、有意抽出をした疑問点であり、強いては他の地域との比較検討の問題であった。

第3点は、インベントリー自体の正確度、(accuracy)精密度(quality)に関する指摘であり、第4の指摘は、老令中・後期の人間の情動を管理するために採用した唯一つのインベントリーが潜在的な不安要因を探るための、ティラ女史の開発したM・A・S (Manifest Anxiety Scale) 邦名「不安テスト*」によったが、わが国でもすでに導入され検討されているが、その結果との有意検定の問題であった。また、数からすれば以上の4点とは質問や指摘の件数とは比べものにならないが、重要な指摘だと思うものは、M・A・S以外のインベントリーによる比較検討の問題と類似性の問題であり、さらにはまた、前回の報告では頁数の制限があって記載しえなかったが、実際にテストに使用した情動性管理・調査票(質問票)の掲載の問題であった。

最後にもう一つつけ加えるならば、管理システムという方法を採用して、しかも老令者の情動の管理を試みたのであるが、具体的な老人福祉の専門化の場のなかでいかなる実効性をもつのか、さらには、また将来どんな問題を含みうるのか等々の疑問についての指摘であったかとおもう。そこでこうした各方面からの貴重な意見や指摘を十分に考慮しながら、しかもその後の調査研究から、それに応えるべき責任を感じ、茲に第2報を執筆した次第であり、さらに批判を頂きたいところである。

I 前回のあらましとその考察から

主として、前回の報告では限定を大衆社会の急激な社会変動の過程のなかで、老令者の心情がどんな風に動くかを研究の主題として、問題の発想から管理指向までの一連の総括的な説明にとどめた。

…とくに、上記の急激な社会変動 (rapidical social changes) の波は、…その社会の下部構造 (組織) である家族集団、老令者にとっては福祉追求一充足集団* (点線筆者附加) にまで波及してきて、その形をかえたのである。その結果、不動の座位として制度化されていたその座は、思想の変遷で1日にしてもろくも崩れ去り、しかもなお確かにその座は崩れ落ちてなくなったとしても最後の絆となっていた構成員相互にみられる信頼、それすらも今裏切られようとしているし、事実、新憲法の共同扶養の一応のたてまえ丈けで、子供たちの経済的事情のまえには絵に書いたボタモチでしかないのが現状のようである。

「走れメロス」は大宰治の作品であるが、決して自分の身がわりに刑に処せられる友の友情を裏切ることができず、約束の期限まで走り続けたメロスのエネルギーこそ、人間のへ信頼、つまり、「私のようなものでも彼は信じていてくれる」彼らのそうした友情は終いに、ざんぎゃくな王をして真実とは、決して空虚な妄想ではなかったと言わしめたし、おまえたち囚人の仲間の一に加えてほしいと腰をかがめて一心に願う王の姿を彼は描写しているのである。しからば、王をして彼らの前に腰をかがめさせたのは一体何んだっただろうか? 疑いもなく二人の青年の心にかよい続けた真実な信頼であったらうとおもう、たとえば苦境や誘惑のなかでも人間が人間を信頼することのかけがいのない美しさそれであつたらうとおもう。

こうして、戸田貞三が指摘した「家族の特質は構成相互の愛情融合にもとづく集団」は、脂
肢の間に残った数粒のかわき切った砂のように、また寒々としたすき間風のような冷たさを感じ
ずる脱愛情融合家族と化してしまったことである。こうして自分の座を失なった老令者達は石
川達三の小説の題のような「自分の穴の中で」しか生きることのできない孤立化へと追い込ま
れてゆき、ついには人間がともに生きるという倫理を喪失してしまった、このような状況のな
かで生きなければならない危機的情況に追い込まれたのである。

茲に、新しい老人の問題として不適応状態 (maladjustment)、自己人間疎外 (social alienation)
が露呈してくる訳で、これを解決するための対策に至っては全く手のほどこしようもないほ
ど複雑に交叉していて決して容易でない。そこで何から手をつけてゆくべきなのか学会や研究
者の間でも不統一でばらばらで、しかもその専門化へと求心的指向に偏しているきらいがあ
り、どうしてももう一度これを統合して協同できるような研究母体をつくるのが先決だとお
もう。

その意味から、極めて基礎的な (Solfège) じみな研究であるかも知れないが、ここに老令者
の情動特性にせまるミクロな捉え方を試みようとしたものである。

数回にわたるプリ・リサーチの結果一応、不備ながらも情動の動きを捉え、しかも管理を可
能とするインベントリーの開発に成功したので、これを用いて対象者を4地区 (一般住宅地・商
店街地区・郊外地区・団地地区) よりえらび出してテストをはじめた。こうして得られた資料を
もとにして統計的に正常値・異常値・標準偏差値などを求め、さらにはテスト値の変動係数を
求めてその変動の許容範囲を算出し、しかもそれを管理表縦軸には平均値を中央にとり、その
上下に標準偏差値のプラス・マイナスの 2σ シグマニ (標準偏差値) の範囲を示す情動性管理
テストの値を目盛り、横軸には時間的経緯を表すため4週間毎にテストをした値をプロット
できるようなグラフを作成して情動のうごきを観察しようとするものである。細かい手法につ
いては後程別の項で述べるとして、前にのべたような4地区すなわち一般住宅地・商店街地区
・効外地区、それに団地に居住する老令者、老人ホームに入居者百名を対象にし、しかも情動
の安定なものから不安定な階級値までを幾つかのランクに別けて、20数名の追跡調査のための
サンプリングをして、4週間ごとに1人10回、延べ210回にわたるテストを実施してみたので
ある。結果は、予想どおり平均して安定性を示す恒常値を示しているし、ところどころ想像し
たようなスパイク様の情動浮動が見られた。しかも通算210回のうち、44件、割合にして2割
ほど出現していることになり、スパイク様に情動が浮動した原因調査を前にものべたかと思う
がテストを実施する段階でわれわれ調査者と被調査者との間に人間的な介助があった方がより
反応に、高い信頼度のあることが実験の結果、得られたのでテスト時にいちいちその対象者をオ
フィスに呼んで充分なオーミングアップ (leadness of test) の後に自然な会話の形のなかで刺
激になるいくつかの設問をおり混ぜながら規定の50項目をテストしていく (interview method)
方針をとったために、その時その時のテストに対する被調査の態度を細かく観察することがで
きたので、彼の反応した情動と態度とからその事情を了解するのに役立ったばかりではなくケ
ース・ワーク過程へと自然に導入されて前のテストから今回のテストまでの4週間の間に起っ
た出来ごとを話してくれるし、同時に他の家族員からも様々な情報を提供してもらうことによ
って、幾重にもフィード・バック (feed back) ををかけてその真実性を高めようと試みたもの
で、比較的真實な形でスクリーニングできたのではないかとおもう。

最も頻度の多かった事由は、配偶者・子供・親族・仲間 (友人) といった親しい間柄にある
者との死別による全人格的な変調である。これは割合にして45%、44件中19件を占めているこ
とがわかる。しかもその情動の動き (振巾) からみて特に身内のものの死が強いスパイク様の

変化を見せている。これに対して振巾そのものはそう深いものではないが頻度からいくと友人の死との対面によって情動の安定をかいいたものが、19件中8件という極めて高い事故件数を示していることがわかる。従って、その“人間の死”ということが情動にかなりの影響を与えていることは避けられない事実として、ここに現われていることがわかる。

つづいて振巾の高いものでは、疾病をあげることができるが、割合にして3割強、44件中14件を占めている。しかもこの疾病の場合は前の「死」とは異なって、他人のあるかなしい状態を指すのでなくむしろ我が身にふりかかった極めて主観的な不安とか恐怖だとおもうが、情動の安定性に大きく影響していることがわかる。従って、その振巾の変動の大きさも明らかに高く、ときにはスケール・オーバーすることさえある。

あとは、前の2原因とは違って、その頻度も小さく、従ってスパイク振巾の深くないものに、家族内の人間関係の緊張からくるものと生活の保障つまり具体的には扶養保障障害とをあげることが出来る。しかも扶養保障の障害が息子夫婦が突然家出をしまして面倒を見てくれるものがいなくなったとか、子供が事故によって死亡してしまったため自分一人になってしまって誰もわしを面倒みてくれる者がいないといった理由によるもので、共通して言えることは人間関係の切断による孤立からくる情動の変動と考えられる。以上、大づかみに情動を大きく動かす諸々の原因について大要を述べたことになる。

従って、その後の問題はこれらの資料をもとにしながら、さらに細かい点について検討することにあるし、今後の福祉問題としてどうその実践的あるいは治療的方向をうち出すための研究が残されていることになる。

Ⅱ 本調査研究における諸限定

限定の1 わが国における現代の老人問題の研究

本研究の限定として、はじめに2つほど規定しておきたい。まずその1は、わが国(日本)の老人問題である、2つはその老人の問題を明らかにするための基礎的な研究を現時点に求めて、今日の課題とも言われている社会問題に迫まろうとする現在の問題を扱ったものである。

承知のとおり、日本の老人問題は今や社会問題として広く政治的解決を迫まられている問題だし、しかも裕余のできない危機的状況(crisis's situations)を露呈している丈けに、急務を要する重大な問題でもある。そこで、何故、そうした緊迫した危機的状況に至ったかを探ってみることから日本の老人問題に迫ってみようとおもう。

老令者によって老後の生活保障とその座とは、古来、日本のイエという伝統的な家父長制のなかにきちんと組み込まれて永い歴史のなかで社会規範(social norm)としてつちかわれ、社会の文化としてゆるぎない不動の精神(こころ)として日本人の精神生活を支えてきたのである。しかも、その家族主義(familism)は、構成員相互の人格的愛情による接触(感情隔合)を中核とする。まさにジンメルが指摘する心的相合作用の場であり、あるいはその高弟子である、ウィーゼの言う「人間関係」の場のなかで形成されるものである。

ところが、その家族「人間形成の基礎集団」はM・ヴェバーの言う扶養共同体(Versorgungsgemeinschaft)の家族機能(family functions)を変異しつつあるのである。つまり、社会事実(fait Sociale)として最早や「個人の心理的現象や生理的現象に還元することのできない固有の現象」として、個人の外部にあって個人を制約するところの力によって、人間家族の結合に若干の異質(heterogenous)現象が現われて来はじめたことである。それを我々は、社会変動(social changes)として都市化(urbanization)、工業化(industrialization)、モータリゼイ

ション(Mortalization)などの社会・経済的な近代化の要因、それに生物的な要因としては人口構造の変化、更には社会を規定している思想の体系である文化などの変化あるいは変動と呼んで、今日の日本の老人問題の深刻さを物語ろうとしている。

大橋薫はその論文「社会病理学」のなかで家族の近代化を3つの特徴(変化)に分けて説明しているが、その彼の理論に従うならば、まず第1点は、家族の機能性の縮少、(2) 家族員の家族への依存性の低下、(3) 人間関係の民主化を挙げている。第1の家族機能の縮少はG・P・マードックの著書“Social Structure”をまつまでもなく核的家族の4つの機能が家族の外在性によって異変をきたらし、[1]もって社会的施設(social institutions)に家族本来の機能を移譲してしまったのである。こうして今や、家族に残された機能とは僅かにあますところ性欲の充足、種の保存、経済的扶養、精神的安定のみとなってしまったという指摘である。第2の“依存性の低下”とは機能縮少によって家族本来の機能の姿が変異してしまったために、人間としての欲求の充足はすでに機能縮少してしまった家族では、十分な充足が補証されなくなったという事実であるかと思う。故に家族員の家族に対する依存度が低下する結果になったのだらうと説明している。また最後の“人間関係の民主化”であるが、従来の家父長という絶対的な権限が新しい家族主義によって強制的に改変され、形の上では、一応民主化され、その構成員相互の人格が尊重されるような、民主的な人間関係を特徴としているという説明である。

こうした、現代家族のもつ機能の縮少の功罪として接触の度合の僅少化、連帯性の弱化へと、次ぎに依存度の低下は家族本位性の使命をそこなう方向へと、更には、人間関係の民主化は家族内の統制力を喪失、つまり家族の教育的機能としての同一化(identification)の対象を失うことにより、子供の人格形成の欠陥という問題が一層深刻化してきたことである。まさにこの状態を大橋薫は危機的状況(crisis's situations)と呼んでその事態を重くみていることがわかる。

一方、こうした外在性によって家族本来の本位性(機能)を喪失してしまって、社会施設に移ってしまったために家族集団にそれを求めても充足されないことになる。他方、社会は“集団ふん出時代”とも呼ばれているように人間の合理化に伴って分割した。多様な欲求充足集団が準備され、第一次の集団に依存度を失った構成員はその集団の独自の安定性を求めて集団に部分的所属することになるが、その集団からも実は人間性の真の回復には機能しなくなってしまっていることである。ここに家族集団にもその全人格的接触と参加[共同生活]が出来ず、ざりとて家族集団にその代償を求めて家族外集団に指向したものの、そこにも充分な集団参加ができなくて、その中間に位置してどちらの集団にも真の所属の出来ないような人間の群が新しい問題として抬頭してきている。これを社会学者は周辺人(marginal man)理論の範疇で説明しようとしているが、集団いつ脱と統制が検討されはじめられてきているのも、実にこの辺に問題の所在があるのではないだろうか。

そこで、この小研究はこれらの事情をかんがみ、現代の日本の老人問題、つまり集団外人間(周辺人)を研究しようとするものであり特にその人間の情動に焦点を合わせて研究しようとするものであることを限定の1つとする。

限定の2 大衆化社会の現況下における老令者パーソナリティの形成に関する調査研究

次いで、筆者は第2の限定として人間のパーソナリティの問題を提起しなくてはならない。人間にとってそのパーソナリティ(social personality)形成は、彼が一構成員として所属する具体的な社会集団の社会的産物といえよう。従って、人間が人間である由縁も実はここにあるのだと言える。言い換えてみれば、人間にとってその集団はパーソナリティを形成する唯一な温床(nursery)ということができよう。

しかも、この人格形成の人間のはじめ(第一次的)集団は、誰も家族という“intimate, face to face association and co-operation”集団を抜きにしては語れないし、その意味で極めて基礎的な人格形成集団と言える訳である。

では、一体家族の何が (elements of personality form) 形成に必要な欠くべからざる要素となっているのか、一応、常識的な事柄ではあるが指摘しておこうとおもう。

その要素の1つに、社会の内在性に求めて、まず社会的に制度化されたところの成熟した一対の男女の性愛 (platonic love) を関係枠とした生産の共同と消費の共同を可能にし、また相互の福祉追求・充足集団であることである。しかもそれは社会的人格の中核に人間に対する自己愛と他者愛とをもち、それを育成する家族の教育的機能の体系と考えられる。

2つは、ボザード(J. H. Bossard)が指摘しているように、その愛を中核とする共同体は、ある特性をもって限定されていることである。つまり「同質」(homogenous)と「少数」(minority)という関係枠によって構成員が限定されている集団を意味している。これらの要素を基にしながら極めて親しみのある(intimate)全人格的な、しかも自由な表現(mutual-communications)の場をつうじてパーソナリティ形成のインプットがなされる社会化(socialization)の場でもある。よって次に挙げる意志の伝達に開閉されているメデウム (communication medium) 培養地となっている。またそれを可能にするための人間社会では、「言語」(人間の言葉)というシンボルを用いて意志の伝達ならびに、相互の交換をする集団からの働きかけとして人格が形成されるのである。

その4は、動物には人格に代わる馬格とか犬格といった、全馬格的とか全犬格的特性というものを持っているとは当惑考えられないことであって、それに関する限り人間個有の特性ということになる。しかもそれに要する期間というものはそうした親しい、表現の自由と同質、少数の運命共同体を (Versorgungsgemeinschaft) 可能にする、家族という集団の具体的な人間関係の従属変数としてそこに形成されることになる。

一般に、パーソナリティ形成を示す図式として $p=f(E)$ (P; Personality. E; Environment.) が用いられているがその(E)、つまり環境(集団)の影響は、まぎれもなく個人の生活(欲求の諸体系)を充足する家族集団ではあるが、その条件は前に述べたような諸要素はもとより、単なる人間の集まりという集合の場ではなく、むしろ相互に機能するところの心的作用の場 (open mind. 自由に開かれた心) というものが前提となっている集団こそが極めて重要な人格形成のファクターとなっているのである。

しからば「人間と共に生きるという」心理的・社会的な生活の場のなかで、われわれのパーソナリティが形成されるとするならば、従って人間が所属する集団が「自己と一体に感ずるが故に、集団の動きを自己の動きとして感ずる」ようなしかも、基本的には心的相互作用の場としての心理的な場をふまえながら、そこに親しみのあるいこいの場としての instifution, association, process の場の産物ということになるならば、附言してこのパーソナリティ形成の要素は、老害った人間の人格をもかたちづくる要素として普遍化していなければならない。ところが常識一般ではこの時期の心理的・社会的特性として橋見氏がいみじくも指摘した「非開発的多様性」をもって代表しているように、創造性の開発という観点では極めて制限された特性(固定化・fixation)として理解されているところである。

ここに、筆者は分析のメスを入れるための実験を試行する動機がある。よって本論文は、老害者のパーソナリティ形成の問題を扱おうとしているが、その上部構造とも言える社会体制、(social-system)つまり家族の人間中心的な構造と機能とを変えた、急激な社会変動との係わり合いのなかで起きてきた問題を取り扱った研究である。

また、もう1つの人格形成の社会的要因のなかに、E・デュルケムが指摘した“fait sociale”つまり個人に対しては外在性となっている客観的なもの、宗教、政治、法律、または道徳的諸制度(institutions)によっても人格の社会的規制を強くうけるということを忘れてはならない重要な問題の側面である。

限定の3 老令中・後期の老人の問題

一概に、とし寄り(老令者)といっても、個体差、暦年、性差などによって必ずしも一定している訳ではなく、新しい老年学(Gerontology)なる独自の研究分野が生まれ、専門的な求心的研究がなされているが、それでも尚その学問のソルフエジュに当る老年を規定するきめ方になるものが見出されないままになっている。

これに対して筆者はその規め手として、普遍的に人間の生理的・生物的老化現象がいつの頃(chronological age)からはじまるかを、さまざまな特徴について総合してみることにより、しかもそのためには多数の資料をもとにした統計的処理の手法を使ったものを、一応の目安として使用に耐えるような線を考えるべきだと思っている。なる程、老化には唯単に生理的・生物的な個体のもつ特性ばかりではなく、それに付随する社会的・心理的な要因も附加されて規定されるべきだと考えられるが、生物の個体の特性の方がより他の社会的・心理的老化に比較して、個体による変動が少くないことが次第にわかり始めて来ている、文献が手許になかったためにその詳細について説明は出来ないが報告が二、三ジェロントロジー(Journal of Gerontology)という米国の雑誌に紹介されていたことがある、また医学の分野でも最近細胞1つ1つの構造が電子顕微鏡などの精密な器械によって細胞内部の構造がわかるようになってきたし、生理学(physiology)、生化学(Bio-chemistry)や物理学(physics)の統合的研究の結果、「生命」現象について相当細かいメカニクス(mechanism) N.Wiener(1894-1964)までも了解されるようになってきた。しかも生体情報学(cybernetics)をサイバネティクスなどという新しい分野は個体の遺伝に参与するリボ核酸(Libo-nuclic acid)の構造や、DNA, RNAの作用についても目覚ましい進展があって、次第に黒いパールが1枚1枚はがれつつある今日である。これらの研究からも年令的变化に相当の相関のあることが明らかにされるようになってきた。そこでこれは未だ発表の段階ではないが筆者は若干の検討をした結果、凡そ67才3ヶ月±8才10ヶ月(67.3±8.10オ)という老令線を出している。しかもプラス・マイナス8才10ヶ月は相当動きうると考えられるが基本的には、58才5ヶ月のところから76才1ヶ月の間に、生理的特性の群が集合していることになる。これは、あくまでも未発表なもので十分な検討を加えた結果発表することになるかどうかとおもうが、こうした老化線の出し方も極めて興味あるものではないかと考えられる。

さて、今回は一応老齡者・中・後期の人間の情動性管理ということで、比較的高齡者と対象に調査・研究したものであるが、それでは一体その時期をいつにするかは、しごく困難な問題としなければならないが、筆者は一応、本学の塚本哲の「規定」に従いたいとおもう。彼はその小着「老人社会福祉」の中であくまでも「老人の福祉を問題にする場合……云々」と限定しながら「老年」という帯状(弾力性をもつ年令帯プラス・マイナスの若干の巾をもたせた)内筆者のつけ加えたもの)時期を設定しながら、この「帯」に歴年令を割り当てる方法から55才の定年を境いに65才までを後期壮年期と呼んで、老年期(adlesence)から区別をしているし、またその後期に当る65才より70才までを「向老期」と呼んでこの年令集団をもアドレセレスから区別しようとしている。従ってようやく70~75才になってはじめてそれを「老年前期」とよんでいるし。つづいて75才より80才を「中期」、それに80才以上を「後期」と呼んでいる。

従って、筆者が選んだ調査研究のためのサンプル向老期老年中・後期にまたがっており、65才以上の男女対象を調査研究の年令的限定にしようとしていることを了解してもらいたい。

限定の4 情動性管理に関する研究

最近、この言葉は「行政管理」とかあるいは又「人事管理」とかはてまた「経営管理」、「健康管理」といった具合にいろいろな分野で、しかも頻ぱんに用いられている言葉である。ところがその意味内容に至っては必ずしも統一された概念として整理されているとは言えないのが現実のようである。ところが、この言葉は社会福祉の研究領域でも決して耳新しいものでもなく古くは「施設管理論」(Social administration)といった形で早くからなじみになっている用語である。

ところが、筆者の使う「管理」(control)の意味の言葉は若干生物学・心理学などの分野で一般化している語意に近いものとおもすが、「健康管理」「品質管理」などの言葉の内容に最も近いものと考えてよからうかと思う。

そこで、この「管理システム」を採用して老令者の情動を一定の間隔をおいてチェックしてゆくことによって情動の継続的な浮動を記録し、どう変化するかを知ることが可能となるのである。従って、この「管理」という言葉は測定時の情動の安定性を知る一方法であってしかも、その浮動の度合が安定性を指示する許容の範囲内での動きであるか求め、仮に情動値がその範囲内であれば多少の差はあったとしてもそれを問題としない。むしろ、その範囲から大きくいつ脱している情動値について、何故、そのような大きな情動の変化を与えたのかをその原因について探ってみようとするのである。

従って、この用語の発生は合理化された近代産業のなかでしかも機械・技術の革新と共に経営組織・管理方式の合理化・近代化の必要から人間尊重の経営管理方式がすすめられるようになり新しい管理方式という言葉が抬頭してきたものであるが、これを複雑な生産工程の中で生ずるミス(誤り)を検討しようとするものに転嫁されたものである。従って具体的には「抜きとり検査」と別名呼んでいるがその名の示す通り、生産された製品が規格や品質の水準どおりであるか否かを無作為に抽出したものについて試験室で細かい実験や測定ををして生産工程における品質の程度をチェックするものであり、従って最終的には品質の保証を行なう管理システムである。

ところで、このシステムを老令者の情動性管理へ応用することになるが、先に述べたようにあくまでもその測定時の情動値の安定度を知るのが第一義的目的である。しかもこの経続的な計測をすることによって、その個人のもつ情動の恒常性(homeostasis)を求めることが出来、しかもある統計的操作を加えることにより、彼のもつ平均値・標準偏差を知ることが求められ、従って平均値を中心に許容可能な変動の範囲を算出することができる。故に情動値がこの範囲を基準として、どの程度の変動であるかを指示する度合を知ることができる。しかもこの方法を使うことによってその問題の発覚や治療の経過、さらには治療の効果などをもある程度インデックスすることが出来るのである。

そこで、本研究報告はこの情動性管理を試行して、老令者のその動きをその原因との相関によって究明しようとしたものである。

Ⅲ 情動性管理方式の方法論的論述

この章では、実際に老令者の情動を管理するための技術的な作業とそのすすめ方に焦点を合せて記述してみる。

まずその段階であるが、プリ・リサーチ・(pre-research)パイロット(pilot-research)

(main research)の三段階に分けてその順に従って述べることにする。

そこで、まず第一のステップとしてのプリ調査の段階では情動性を計るテスト (inventory of the emotional states) の信憑性を確めるための基礎調査であって、被調査者に与える刺激 (stimulus)、つまり S.O.R. 系 (Stimulus-Objective-Response System) のなかである状態を知るために設けられた設問文であるが、それが容易に受け止められ、しかも与えられた刺激に対して十分に反応できるかどうかを検討するものである。これは、一般に老令者、特にその高令に従ってその文章化が問題とされるところであるが、その設問には特別な心の配りよが必要かとおもうのである。しかもその単調な設問のくり返しと、その反応系の選択肢からくるわずらわしさが効果を一層を低下させ、調査に対する興味のうすれ、それに設問長さからくる緊張と疲労をも同時に検討してみる必要がある。

そこで、この段階ではこれらを支点としてそれに関わる問題の検討からはじめることにした。特に手取り早く老令者をつかめる意味で外来に診察に来る患者を用いて、比較的意識の明確なもの、そうでない者とを各々二十名ずつ選んで、医師の診察後別室にて十分にこちらの意図を説明した上で特に設問文がスムーズはうけ止められ、充分意味が了解され反応系に連がるかをたずねてみることにした。しかも同時にその反応までに要する時間などもストップ・ウォッチで測定して、後の検討の資料に備えた。

その結果、全般的には良好な成績をあげるインベントリーとしてその情動性の管理に使用できること、またテストの検討・反省として全りよく答えたがらない老令者が少くないことであった。その理由には刺激系の問題として『プライベートなことで何か抵抗があり、恥かしくて正直に答えるのがなにかと……』言々と言う消極的な態度とその感想からもその事情を了解できるともおもう。また、問いの意味がわからないもの、言葉の意味のわからないもの、更には、反応系の問題としては、選択肢の問題で、その限られた二つの選択肢では充分に表現できないもの、等々といった幾つかの不備な点を指摘された。とくに、反応時間では高令に従ってその反応時間が平均よりかかり過ぎていることである。しかも事由を検討してみると、いずれもその刺激文として設問を読むのに時間がかかり過ぎることである。必ずと言っていい程、二、三度読み直していることから、高令者用には未だ未だ若干の手直しが必要である。しかもそれを強行しようとするとは拒絶をもしかねない。事実、四十例中僅か一例であったが「こんなものやっているとイライラしてきちゃうよ…」と不気嫌な顔をして立ち去ってしまった患者もいることから、今後の問題としては再検の余地がある。

そこで、一応その終了までの時間を統計的に処理し、しかも、それを年令とクロスした結果を整理してみると表(1)のようになり高令とともに反応終了時間もまた延長していることがわか

表 1

agegp.	T.Time	平均時間±S.D.
70～74 (才)		27'20"±11'30"
75～79		35'11"±11'50"
80～84		38'45"±13'03"
85～		45'±15'05"

表年令別による反応時間

る。70～74才の年令集団では平均27分20秒、しかも標準過差 (S.D) 11分30秒という指数から終了時間の早いものでは15分50秒で終了する反応の遅い者では38分50秒を要することを意味している。そこでこれらの結果からしかも高令者の集中度から可能ならば終了時間を20分内外におさめたいと考え、改良が必要となってくる。

次は、インベントリーのテスト自体の信憑性の検討であるが、同一の対象者について同一テストを数回繰 (test-retest method) り返してみ

た時の情動値のバラツキの問題であるが、この点については極めて高い再現性 (0.88) を示す結果を得たのである。従って充分なものとは言えないまでも一応、情動性の安定を測定するスク

表2 頻度表

情動値(点)	頻度(人)	割合
1 — 5	2	0.4
6 — 10	14	2.0
11 — 15	42	6.0
16 — 20	67	9.0
21 — 25	110	15.9
26 — 30	142	20.4
31 — 35	137	19.6
36 — 40	116	16.6
41 — 45	62	8.9
46 — 50	4	0.6
	696	100

表3 頻度の男女別

情動値階級	頻度	(男)		(女)	
		f	%	f	%
1 — 5	2	2	0.6	0	0
6 — 10	14	11	3.1	3	0.9
11 — 15	42	24	6.9	18	5.4
16 — 20	67	32	9.1	35	10.3
21 — 25	110	44	12.6	66	19.3
26 — 30	142	72	20.5	70	20.1
31 — 35	137	66	18.8	71	20.1
36 — 40	116	61	17.4	55	15.9
41 — 45	62	36	10.2	26	7.6
46 — 50	4	3	0.8	1	0.3
Σ	696	351	100	345	100

表4 階級度数表並びに級中央値, 偏差表

class	f	X	X-f	X-x	(X-x) ²
1 — 5	2	3	6	-26.1	681.2
6 — 10	14	8	112	-21.1	445.1
11—15	42	13	556	-16.1	159.2
16—20	67	18	1206	-11.1	123.1
21—25	110	23	2553	-6.1	37.2
26—30	142	28	3976	-1.1	1.2
31—35	137	33	4521	3.9	15.2
36—40	116	38	4408	8.9	79.2
41—45	62	43	2666	13.9	176.6
46—50	4	48	192	19.9	396.0
Σ	696		20,196		2114.
x			29.1		

S・D(Standard Deviation)を求める公式は

$$\pm \sqrt{\frac{1 \cdot \sum (x - \bar{X})^2}{N} \dots} = \sqrt{\frac{1 \cdot (2114)}{696}} = 3.04 \dots$$

となり \therefore S・D=3.04を求めた。

情動性を管理するために本法ではこのSD値を2SD値をとり、よって、

$X \pm 2S \cdot D$ により

29.1 \pm 6.0 従ってその範囲は

23.1 \sim 35.1 とする。

参考文献 David Magnusson, Test Theory. Addison-Weiley Publishing Company. 1967. p. 8.

リングとしては、十分に信頼に足るインベントリとして使用を可能とする確信にいたったのである。

第二段階・(パイロット・リサーチへの展開) 次いては、この段階では統計的な資料を求め一応の平均値並びにその統計的正常値を求めるための下準備として多教原理の法則を使って第一回目の調査対象者より多数のサンプルを得ることにした、しかも同対象について三回のテストを試行した。

対象はプリ・リサーチの時のように病院の患者のファイル・ケースより無作為に696名を抽出して、外来に通院のつど個別にテストを実施して結果を得た。結果は情動値を五点間隔の階級に別け、その頻度表を作成した表(2)はそれであるが階級値、26 \sim 30点を中心にならなりつり鐘型の正規度分布を示していることが予想される。そこで一連の図表について説明を加えてみよう。まず2表は各々の情動値を五点間隔で十の階級に分けて、各々その得点を頻度表に表わしたものである。最高、情動値26点から30点に含まれるものが142名で全体の2割を占めていることになり、表はそれを境にして上下に分布していることがわかる。なお表3はその男女別の頻度表を表

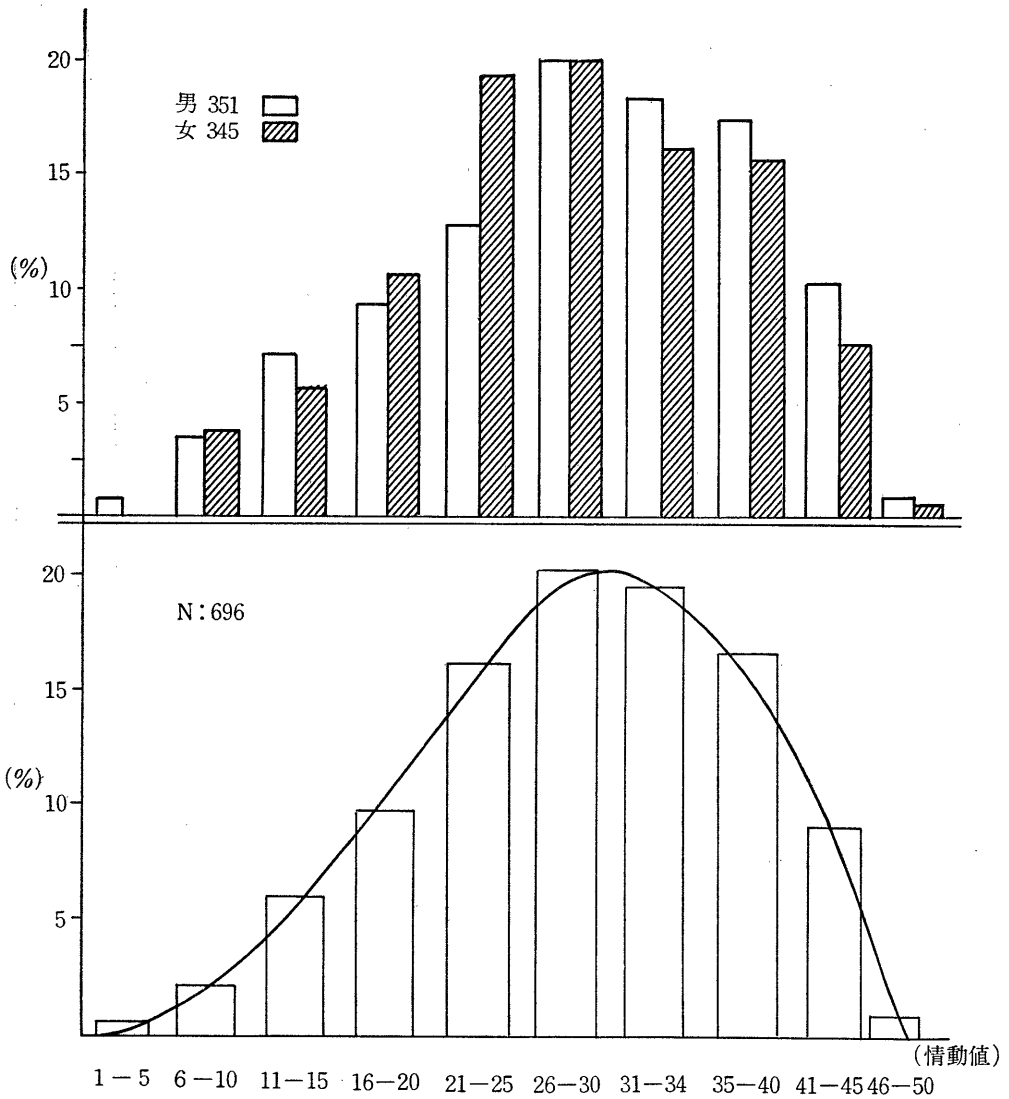


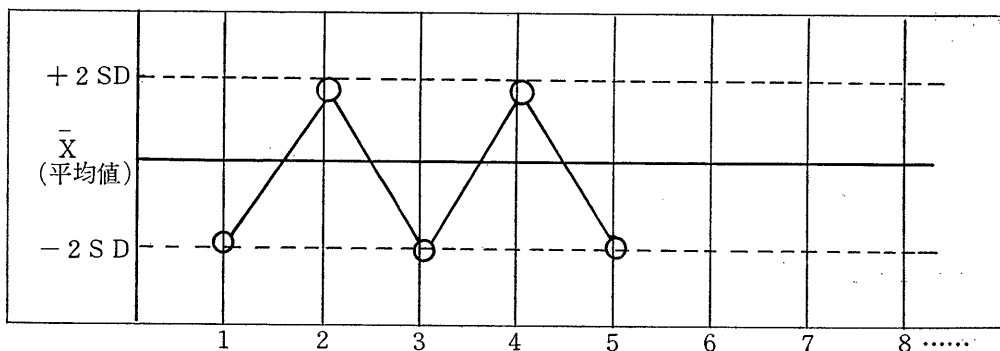
図1 全数並びに男女別のヒストグラム (histogram)

わしている。次に、図1の下図を見てもらうとわかるように、若干情動値の高い方にやや傾きはあるもののつり鐘型(binormal distribution)を呈していることがわかる。ところが図1の上図に書いた図表は表(8)をもとにしてそれを男女別の情動値の分布を試みたものであるが、一般的にはそう大きな形態上の相違はないが、若干女性のきれいに分れた正規分布に対して、男性の方は値の高い方にシフト (shift) しているのがわかる。

以上のような統計的操作をとおしてその平均値と標準偏差値とを求め (表(4)参照)、「大多数

の原理」に従って凡そ95名(normal distribution with percentages)の対象者の情動値を一応「正常値」と仮定して継続的な調査の結果(情動値)をその管理図にプロットしてゆくのであり、しかもその値がその許容範囲内にとどまるか否かを検討してゆくものである。

そこで、次ぎにその管理図を説明するが、基本的にはグラフの縦軸にはその情動値を、横軸にはそのテストの回数をとり。しかも縦軸の目盛上にまず先に求めた平均値をとって横に線を引き、続いて平均値(29.1)の上・下限に標準偏差値・2S.D(6.0)をとる、つまり平均値の上限の2SDはプラスの範囲であり、下限の2SDはマイナスの範囲ということになり、一応そのマイナス2SD(23.1)からプラスの2SD(35.1)までの範囲をその変動の許容の限界とすることである。こうして作成したものが図表2である。



図表2 管理図

実際には、これに従ってテストで得たスコアを横軸にプロットさせながら、時経的にその情動値を折線(赤線)で結んでいく方法をとるものであって、一見その浮動の様子とスパイク様フラクションを発見できるように作成したものである。

なお、サンプルはいずれも東京山の手(杉並区)に居住し、しかもある特定の病院に成人病予防のために定期的に診察に来院している65才以上の老令者を有意に指定した四地域から抽出して追跡調査の対象者としたものである。

情動性管理インベントリー

有	無	DK	NA

1. 気分がどうもすぐれなかったようにおもえる
2. おなかの具合がすぐれなかったようにおもえる
3. 何もかも思うようにいかずイライラしたようにおもえる
4. 何事をするにも落ちつかず何となく緊張がとれなかったように思える
5. こゝ一つという仕事に専念できなかったようにおもえる
6. 金銭的なことで気が重く感じたようにおもえる
7. 困ったことが起こるのではないかといつも心配していたように思える
8. ねむられなかった夜があったようにおもえる
9. いつになく心ぞうの動悸が気になったようにおもえる
10. なんとなく胃の調子がわかったようにおもえる
11. 熟睡できず、物音におびえたことがあったようにおもえる
12. 他人には話せない不吉なユメを見たようにおもえる
13. 心の動ようが見破られないように気をつかっていたように思える
14. ちょっとしたことに腹をたてたり、深く思い込んだりしたことがあったように思える

有	無	DK	NA
---	---	----	----

15. 普段なら比較的平静さをよそえるのにそれが出来なかったような気がする
16. ひとから感情を害されたような気がしていやな気持ちになった
17. かなしくて泣きたいことがあったような気がした
18. 他人がうらやましく思えたことがあるようにおもえる
19. 幸せな日々をおくれたという気持ちになれず、ゆうつな日々を送ったようにおもえる
20. 理由はすっきりしていないが理由のない心のわずらしいをしていたようにおもえる
21. 自分に危害を加えることのない人間や動物または物事に恐れを感じたりおびえたりしたことがあった
22. としがいもなく自分を意識しすぎていたようにおもえる
23. なにもかも悪く悪く思えてならなかったようにおもえる
24. さ細なこと、つまらないとわかってしてもついそれに心がうばわれて病み、大事なことを忘れてしまったような気がする
25. 生きていくことがそんなにつらく重苦しいものかと思っても見なかったが、はじめてその若しみを経験したような気がする
26. 自分を取りえのない人間だと思いつくようになったことがある
27. あせってばかりいて仕事が手につかなかったようにおもえる
28. 自分はもうおしまいではないかと淋しい気持ちにおそわれた気がする
29. 困難なことに真正面から取り組みずさけて通ったような気がする
30. 融通性がなく、なんとなくきこちなかったようにおもえる
31. なにごとも最後までやり通せたものがなく自信を失ってしまっていたようにおもえる
32. 大事な約束をついうっかりして忘れてしまって大変な目にあったことがあったようにおもえる
33. 人の交わりに自分からさけて近づいていかなかったような気がする
34. 家族のものから年をとっているからと言われて敬遠されたような気がして気分がはれなかったような気がする。
36. つまらないことにめいってしまってそれにこだわりすぎて抜け出せなかったことがあるように思える
37. ものごとに集中できなくて何をやっても満足いかなかったようにおもえる
38. 余りに忘れすぎて、家族のものからしかられたことがあったような気がする
39. 思いきりがわるく、いつまでも心残りがして残念でならない思い出があったように思える
40. 生きていても意味がないように思えることがあったように思える
41. 関心や興味の度合いがいつもよりうすれていたように思える
42. 社会の一員だと感ずるより皆んなから切り離される思いになやんで気がふさいでいたように思える
43. 自分のうけとり方が悪くてひとから誤解をうけたような気がするように思える
44. 一人ぼっちだと感ずることがあったようにおもえる
45. 物おもいに沈んで、何もかにも暗く見えたようにおもう
46. なにかにとりつかれて何をするにも恐しかったようにおもえる
47. なにも食べても味がなく、食欲がなかったようにおもう
48. ものごとに感じなくなってしまうような気がするようにおもえる
49. ひとの言うことが信用できなかったような感じがする
50. まわりくどいことや、いいまわしのむつかしい言葉、それに一度にいくつもの仕

事を頼まれたが、めんどくさかったり全部が理解できずに困ってしまったことがあるようにもえる

Ⅳ 結果の概要

第一報に引きつづいて、今回の第二報では先に述べたような理由で、調査対象の数も前回の21名に比較して先の一報の統計的検討のために選んだ100名全員について実施することにした。もっとも老衰あるいは病気などの理由によって死亡したもの、また自殺、自動車事故による死亡者更には他府県に転出のあった者があり差し引くと94名と減るが、三年間にわたる、追跡調査による延べ2,863回に及ぶテストを実施することができた。

以上この章では、その後の結果を概説することにする。

まず、はじめに表5を参照されたいがこれは前回のものとの出現率を表示したものであるが、前回の延べ日数210回に対して情動性の変動のあったもの44件ということで、凡そ二割弱の21%という出現率を示しているのに対して、今回の調査では延べ数2,863回、しかも変動件数は693件ということであるから出現率を算出してみると、二割五分(24.5%)というように大差のないことが理解されよう。

表5 前回のテストとの出現率の比較

	総件数	出現件数	出現率
前 回	210	44	21 %
今 回	2,863	693	24.5 %

次いで、その情動変動の主な原因との関係を図表にあらわし。しかもこれを前回のものと比較整理してみると(表6)になる。一見して可成りの数量的クイ違いの出ていることがわかる。特に大きく変化したものでは、死別による情動の変化が前回、45%に対して今回は、28.3%と約半減しているし、さらに子供夫婦との間に生じた葛藤が原因で安定を欠いたものでは逆に、前回の8%に対して今回の調査で以外と約三倍もの増え方を示していることがわかる。また疾病では、若干今回の成績が低下しているがその大差あるものとは考えられない。ただ、前回では現われてこなかったものに、今回相当数出現したもので「その他」という理由が59件ほど数えることが出来るが、これは後程述べるとして、原因のはっきりしないも

表7 変動原因と変動係数との相関

変 動 変動原因	一変動係数一			件 数	
	1C・V	2C・V	3C・V	小計	
配 偶 者	0	3	8	11	
子	0	0	17	17	
親 族	親	0	2	0	2
	兄 弟	3	10	2	15
	その他	48	17	4	69
友人・知人	49	23	11	83	197
離 婚	2	0	0	2	
別 居	6	0	1	7	9
子供家族の問題	30	87	38	155	155
疾 病 (本人)	9	10	99	118	
(その他の家族員)	51	17	17	85	203
生 活 不 安	4	37	29	70	70
その他(原因不明)	33	9	17	59	59
計 (件)	235	215	243	693	693

表6 情動変動の前回との比較

1. 2. 報の比較 変動の事由	前 回	今 回
	件数 / %	件 / %
死別によるもの	19 / 45	197 / 28.3
生別によるもの	2 / 4	9 / 1.7
息子夫婦とのトラブル	5 / 8	155 / 22.1
病気によるもの	14 / 35	203 / 29.3
生活の不安	2 / 4	70 / 10.1
そ の 他	—	59 / 8.5
総 件 数	44	693

ので、しかも情動性の安定を欠いているものがこれである。

では、今回の調査の結果を表にまとめてみるが細かい理由まで記入していないが、前回のモデルに従って分類してみると凡そ表7のようになる。

ところがこの表では充分な了解が出来ないので、各々その変動係数毎の頻度を割合で図示(表8)してみると、比較的変動係数の低い(1.cv)ものについてその順位をみてみると死別42.5%、疾病25.5%、その他意識理由はわからないが情動の変動をもたらしたものの14%、それに子供夫婦との葛藤12.8%順位となっており、人間の死、人間の病気といったものが情動性の安定を欠いていることが判る。さらには、中程度(2.cv)の変動をもたらせたものでは、子供夫婦との葛藤、死別、生活の不安、疾病などの順位となっており、各々40.5%、25.5%、17.2%それに12.6%の割合となっている。

ここでは比較的中程度の情動変動を順位別にそれを考えてみるのであるが、特に子供夫婦との間に起きた諸トラブルがその原因で情動性の安定を乱していると言うことが注目されようかとおもう、しかもこの中程度の変動では極めて高い割合を示していることから重大な問題を含んでいるものと察するところがある。

さて、変動係数の最も大きかった(3.cv)、つまり管理図にシャープなスパイク様のフラクション(fruction)を示したものでは、一位には、病いによって起きた情動性変動である。しかもその他の事由をおさえて48%とこれまでの最大の割合を示している。続いて二位には、死別によるもの、以下子供夫婦との葛藤・生活不安という順位になっており、二位以下の割合が疾病の割合に比べて三分の一以下となっており、極めて明確な分離が出来それらの間に若干の有意差が出ている。

以上その変動係数の大小によって、各々にランキングを求めたのであるが、総括的には一位と二位との差に極めて高い有意差を示していること。また、その原因内容を見ると特に一・二位のランクの中に入ったものでは、やはり疾病と死別とを挙げることができ、しかもこれらは前回の調査と全く同様の結果を得たことになる。

さて、以上挙げたこれらの表からその大要を理解しえたとおもうが、更にクロス分析を試みながらファクト・ファインデングス(fact finding)をしてみようとおもう。まず、第一のクロス・分析では四地区より抽出した対象者について居住別による特性を検討しようとするものである。

表9-1の事故発生件数の項をみてもらうとわかるように、各地区別の割合を示しているがこれによると割合の低いもの(安定性を保持している居住地)は老人ホームに入居している老令者がそれに当り、続いて、商店街地区に居住するもの15.0%、効外居住者27.2%、そうして最も高い割合を示したものが一般住宅地から選出した老令者であって三割弱くの29.2%という割合を示している。理由については未だわからないが老人ホームに入居老令者情動性の安定に驚くものがある。また商店街地区より抽出された老令者に安定性を示しているのがわかる。

そこで各居住地の老令者の変動係数別の分布を表(表9-2)で示してみたが、全般的には平均化した散布を特徴としており特別変化のあるものが見つからないが、強いて言えば老人ホーム

表8 各変動度合による変動原因の順位

C.V.	1 C.V.	2 C.V.	3 C.V.
順位	1 変動係数	2 変動係数	3 変動係数
1 位	死別 42.5%	子供夫婦の葛藤 40.5%	疾病 48.0%
2 位	疾病 25.5	死別 25.5	死別 17.3
3 位	その他 14.0	生活不安 17.2	子供夫婦の葛藤 15.6
4 位	子供夫婦の葛藤 12.8	疾病 12.6	生活不安 12.0

表9-1

		一般住宅	商店街地区	郊外地区	団地居住者	老人ホーム		
対 象 数(人)		20	20	24	15	21	100	
総 延 数(回)		593	588	600	420	563	2,863	
事故発生件数		202	104	158	188	41	693	693
		29.2	15.0	22.7	17.2	5.9	100%	
変 動 係 数	1 CV	58	32	50	75	20	235	
	2 CV	69	45	59	28	14	215	
	3 CV	75	27	49	85	7	243	
総 計		202	104	158	188	41	693	

表9-2 (各地区別の発生件数を100とする変動の割合)

変動係数	1 CV	28.6	30.8	31.7	4.0	48.7	
	2 CV	39.2	43.3	37.3	14.7	34.2	
	3 CV	37.2	25.9	31.0	45.1	17.1	
	(%)	100	100	100	100	100	

表9-3 (各変動別の発生件数を100とする地区別の割合)

変動係数	1 CV	24.7	13.6	21.3	32	8.5	100
	2 CV	32.1	21	27.4	13.1	6.4	100
	3 CV	31.1	10.6	20.2	35.2	2.9	100
							(%)

に入居している高齢者に変動係数が高まるに従ってその割合も低まっているところから、予想外だが極めて安定化していることを物語っているものではないだろうか。ところが次の表(9-2)では、可成りの相異が見られる。これは変動係数を標準にそれとの各地区居住者とのクロス表であるが、これによると中程度の変動では一般住宅居住者、郊外居住者とその他の各地区との間には、有意差を認めることができる。変動の最も高い3 C. V. では一般住宅地区に居住する高齢者、団地入居者の高齢者に高い割合が現われていて、その他の居住者との間に相当の有意を認めることができる。以上の分析の結果、一般住宅から抽出した高齢者階層は情動の浮動が目立って顕在化している事実また、団地入居者の間に安定性を欠く問題状況があることがわかる、第三点は一般に商店街に住みしかも自分も何か店の仕事に参加している老令者に情緒の安定性を認めることができる。ところが先に述べた老人ホームに入居している老令者に、情動の安定がみられるのは何んだろうか、とくに地域のなかで何ら社会的役割を持たない彼らに安定性を保持しているその理由は今後の研究として残しておくとして、その相関関係を探るために比較的バラツキの安定している郊外地区に居住する農家の老令者と商店街に居住する高齢者とを比較してみると、どちらも近所、隣りのつき合がよく J. L. モレノが示した社会計量法(Sociometry)アトラクション(attraction)およびリパルジョンの(repulsion)集団関係の指標を用いて計測してみると、そう差は目立たないが若干郊外地区居住者にアトラクション

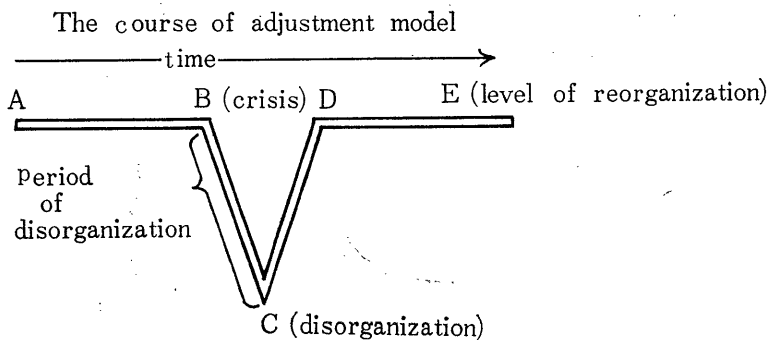
(牽引)の対が多く、「反撥」の対が極めて少ない。また、商店街の老齡者は牽引の対にやや優位を示しているが他方、反撥も決して少なくはないことがわかつた。確かにこれを以て確定的な証拠にはならないが郊外地区の老齡者の牽引対を可とすると、商店街地の老齡者で 0.83 と、僅かに郊外地区老齡者に仲のいい、いつも行き来している、しかも相互にその友情関係を持っている数が多いことを示している。他方、反撥では、商店街地区老齡者に郊外地区居住者より顕著な差を示していることである。つまり前者の対数一とすると後者 0.47 と約二分の一減ということになっており、これからして、「顔を見るのもいやだ」、「同じ町内会でも彼とは一緒に役づきにはなりたくない」等々とはっきり意志表示をしており、その結合関係を拒絶するものさえあることから地域社会への帰属性 (community belongingness)、更には地域感情 (community sentiment) などからも、より郊外地区居住者にその安定性が見られる。しかも抽出した五地区居住者のうち最も安定していることが了解されるところである。

それゆえ、彼らの所屬する地域社会との帰属性からくる情動への影響はそれを左右する重要なファクターとなっていることが理解できるのである。

特に表 (9-3) より、変動係数を横にながめたものであるが、今全般的な観点からその特質を列挙してみると各変動階級とも同じような分布傾向を示していることがわかる、つまり割合の小さなものほど安定性を示していると考えれば、安定性の高い方から老人ホームの入居者商店街地区の居住者、郊外地区居住者、続いてその差が問題にならないが一般住宅地区居住者と団地居住者という順序になっているが。むしろ逆に安定性を欠くものから順にあげれば、団地居住者と一般住宅居住者に最も安定性の低さを示しており、商店街居住者と老人ホーム入居者に極めて高い安定性を示していることになる。

さて次いで情動性管理図から、情動性変化の度合とその特性を追求するものとして、図表上に現われた諸々の波形をもとにしながらその二、三の特徴を記述しておく。

幸いなことに、R・ヒルがその著書、「家族」の中に用いているモデル(The course of adjustment model)は筆者が採用している情動性管理と似たグラフ(emotional graph)が、時經的な僅かの変化をも捉えることが出来るように工夫しあるために、しかもその情動の動きが予後どんな風に恢復するかを記録するのに適しており、組織化の水準と恢復後の再組織化の水準との位置関係を求めるためにも、またしかも危機的状況を示す組織化の解体をスパイク様のみぞであらわすことが出来るので、その状況を詳細に觀察するのに適したモデルである。図表 (3) は



図表 3

それであるが、今仮りに情動性の安定性を示すスコア(値)がA氏の場合、平均38.1とする、しかもその変動係数が2. CVをもってしても 2. 標準偏差値を越さないとするならば情動の恒常性から、毎回のテスト値は凡そその平均値を上下する範囲内にとどまると考えられるが、もし

仮に何か情動性の安定を大きく動かすような危機的状况が起ってその値を大きく変動したとする、例えばA氏の場合では子供（長男）が交通事故に遭遇され、彼の妻と三人の子供それに年老いた自分たち二人が残されてしまった事例である。老身でしかも残された老後は唯ひたすら長男夫婦の世話になろうとしていた矢先に今度の事件にあわれたのであるから、管理図には、普段の時の平均値から大きく変化していることが出ている。しかも自己の持つ許容範囲からもう脱しており、グラフの様相からしてもその時の情動の動きをある程度まで想像することができるかとおもう。しかしこのケース丈けではないが大きな変動を経験すると彼のもつ組織化のレベル(level of reorganization)つまり事件前に示していた恒常的なレベルに再び情動が恢復して戻るということは無いということである。しかも折悪く、引きつづいて最愛の人生の伴侶者である彼の配偶者が三ヶ月も経ぬうちに他界してしまい、残された息子の嫁の実家にやむなく世話にならざるを得なくなったが、最早、情動にはかつてのような抵抗力がなくなってそう大きな変動ではないが大小不同のスパイク様状況が、しかも上ったり、下ったりして安定しておらず、ついには、身体の様子にも変調が出てきて止むなく強制的な入院という異常な事態におちいり、訳のわからないうわ言を言ったり異常な行動が二、三日続いたようだが、ようやく一週間を経て平静さを取る戻したとみえて食欲も出、同室の仲間とも少し話しが出来るようになって来た。最早この機会をとらえて細かく彼の心にプロジェクトされた歪みについてケースワークをしながら、先に述べたようなことが、つまり経済的不安「これから一体どんな風にして生きていったらいいのか、わたしには想像もつかないんです。子供さえ死ななかつたらしばらくの間ばあさんにも先立たれ生きる甲斐がなくなったんでしょかね。助けて頂いて有難度うございました。」といい、数週間のちに嫁に連れられて家に戻っていったが、二度と情動性はその安定性を恢復せず、僅か半年足らずでこの世を去ってゆかれたのである。この間あらゆる方法を通して彼とは出来る丈接触を求め、治療過程にのせようと努力するのだが終いに効を奏することなく死去した例である。

この例でわかるように、いくつか形態上の特質を列挙しておく、まず第一の特質は親しいものとの死別によるスパイク様フラクション(R・ヒルのモデルでは点B・C・D)疾病、人間関係の葛藤などを挙げるができるがいずれも、情動に作用する力は強く、特に老令期中、後の人間にとっては全人格的なゆきぶりを与えるものと考えられ、そのことは先の管理図に顕著に表われていることがわかる。これが第一の特質である、次いて、第二の特質は、R・ヒルのモデルに従えば、角 B. C. D (∠BCD) はその情動性の変化の強さとその恢復とを表わすファク

表10. 年令別フラクション角

agegroup	∠θ
65 — 69	1.0とすると
70 — 74	1.7
75 — 79	1.9
80 —	2.2

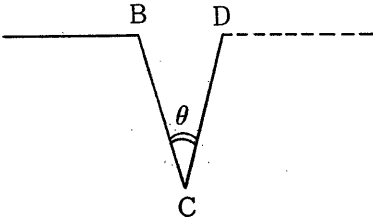
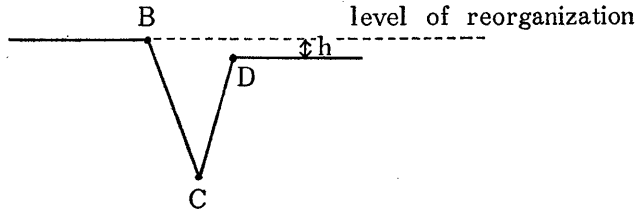


図 表 4

ターを意味しているがこれに目を向けてみると、その大きさと年令階級との間にある正の相関を発見することが出来るのである、つまり変動係数, 2.ないし 3 CV. と比較的大きな変動を呈している場合では、その角 ∠BCD の開き具合が高令に順じてその開きも大きくなり、特に年令集団階層70才と75才の間に有意差を認めることができたのである。しかもこの年令階層間

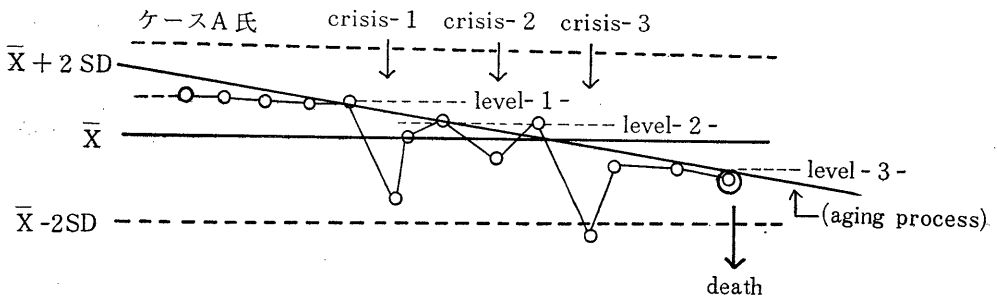
での性差も目立ち、比較的70才までの階層ではそれ程性差による有意が認められなかったのに対して、75才以上の階層では高令に従って女性の安定が目立ち、男性の不安定と $\angle BCD$ の開きが大きいことに気づくのである。第三点は、彼のもつ比較的安定性を保持している恒常値が何らかの危機的状况によって、一度全人格的情動に影響が与えられると情動は之に遮ったかのような外見上の様相を呈しているものの、エモショナル・インベントリーを実施してそれを数量化しておく、彼のもつ恒常値には近づくという結果(図表5)である、とくに年令との関係では、高齢に従って一層強く、70才以下の年令集団とそれ以上との間にかなりの相関を示



図表 5

しているし、有意検定でもその差が明らかにあらわれている。これらの事実から情動変動の原因にもよるが、大きく変動させたものではそのスパイク様のフランクシオン、角BCD($\angle BCD$)ならびに再組織化の水準線(level of reorganization)が組織(恒常線)との間の情動差の絶対的差(h)などの諸発見である、いずれもこれらは今後の新しい課題となるがここでは、主としてその特質すべき事柄についてのみ特筆しておくにとどめることにする。

更に、このような危機的状况が繰り返され繰り返されおこると、その再組織化水準の低下が目立つようになり、高齢化に加速度に作用していることがわかる。この関係を示したものがA氏をケースモデルとして作成したのが下のエモショナル管理図である。



図表 6

V 考 察

たしかに、その特徴は他の年令集団に比べて彼らの情動いき値の中の狭いことであり、しかも極めて感受性に富み、さ細な状況でも大きく受動し感ずるところの心理的機制をもっているように思える。つまり、物理学の領域で取り扱うところの真空管の原理を説明に用いる概念に近いメカニクスが高齢者の情動にも作用しているのではないかという仮説を導き出すことになる。常に社会生活という枠組として捉えるところの具体的な人間関係が、ここで言うB電圧

としてのエネルギー作用の一定の水準を与え、これに対してチャージ(消費)としての接地電圧として社会生活の場のなかに生じたところの生産、つまり人間関係から生じたところの心理的、社会的充足との間の電位の差が更に心理的・身体的あるいは社会的なフィード・バックとして作用して新しいエネルギー貯えられ、また消費される。こうした情動モデルを試行することができる訳けである。そこで一度このバランスを破ってB電圧よりす接地電圧の方が高くなってしまうと、そこにエネルギーのギャップが生じてギャップをうめ、平衡化を計るために他から生産に使用される電源・又は補助のために貯えてあったエネルギーを消費することになるが、こうした余備エネルギーをもってしてもその平衡が恢復されないで、一方的に消費に電位が流出してしまうと、社会的生産である人間関係を断ってまでもそのエネルギー保持のパワー水準まで活動を中止することになる。これは確かに単純な仮設でしかあり得ないが、どこまで物理的現象と相通ずる類似性をもっているのか。またその物理学の諸原論にてどこまで情動性のメカニズムを説明しうるのかが疑問となる、従って後の機会では主としてこれらの理論研究を進めていくとして、ここではどこまでも今回実施したら実験と観察とに限定して、単にその事実のみを明記することにした。

まず第一の点は、前回の追跡調査(follow-up research)のために二十数名をしかも有意抽出して、延べ二百十回にわたる実験から得た結果を主として分析し、報告したが、第二報では、その基幹テストとなっているインベントリがどれ程多数原理の法則からあとづけできるかを検討してみた。結果については先に述べたが test-retest-method で前回の再現性(信頼度係数)が0.2に対して、今回の2,863人の高齢者を無意抽出して統計的处理を加えてみたところ、信頼度では0.88と極めて高い信頼性を示す係数を得た。しかもラストの信憑性を指示する正確度と精密度のいずれも良好の成績を上げることができ、不安定な情動を探るために感受性の高いテストに改善できたものと確信している。

第二の指摘は杉並山の手地域に限定して調査対象とした点についての問題であったが、ようやく川向うと言われている葛飾区のある老人クラブに集まった高齢者を任意に調査しているのて整理した段階でいずれ発表できることと思う。

第三点は情動性安定度を測定する開発したインベリトリーと既存のパーソナリティ・テストとの比較相関の検討であったが、一部情動性の変動をきたらした対象者についてはその度ロール・シャッハ法によってプロゼクションを追求しているが、数多くの検討をしていないので未だ発表の段階ではないとおもひ、後程にゆずるが、一言申そえるならば口法で特に空白・反応の頻度が多発している、比較的安定な色や形に反応せず、形の上では小さなプロットに刺激がより集中する。また色彩では明るい美しい色への反応がにぶって黒白の濃淡のさかい(境)を常に気にしながら反応していることが了解されている程度である。しかもまた、同時にワイスによる知能テストを試みてみると、情動性の変動のあった場合には可成り有意ある差を呈している者があるが必ずしも全般にわたってさうゆう特徴が現われているとは言えない。これも今後の問題だろうとおもう。

最後に情動性管理を通じて、老人社会福祉の場にどのような有効性を提供しうるかという実践的課題であったが、第一報ですでに述べた通り今日の老人福祉サービスが、その対象とする高齢の個別性などでは全く範疇になく、科学的処遇とは言うものの、どのようなニーズがどの程度充足し、何がどの程度不足しているのかをしらべず、物心両面の福祉サービスを提供しているのだが、乱暴な言い方かも知れないが、彼の生命老化指向を規定として、その充足との平行的サービスをjもって補足をするという原理が考えられねばならないとおもう。つまり、身体的老化が極度に低下している高齢者に地域福祉との接点としてコミュニティ参加を指

導する場合があるが、それへの反省として情動性の老化を測定しながらどの程度の老化かを適格に指標しながら、老化に伴って反応のおこさない程度のサービスを求めていくことが望ましいとおもうのである。

唯そうした実理的な技術のみでなく、老化現象を知る上でも極めて重要な基礎研究だともおもう。従来、その社会的老年をどこに求めるかが老令の規定するための方法がまとまっていなかったが、こうしたじみ研究によって70才前後の年令集団に極めて顕著な有意差がこの情動の安定性に関しては確信できたし、むしろこうした基礎研究こそが急がねばならない今日の課題でもあり、これをふまえないところの研究が実に多量の資料を駆使して精密な大規模な実態調査を繰り返したとしても、それとの関わり合いという点でギャップをまぬかれないのである。

お わ り に

近代科学の進歩とそれに伴う科学技術の進展は、たしかに、人間の物質文明にはある豊かさを与えたことは言うまでもないことであるが、そうした反面、最早人間は歯車化されともに生きるという基本的な倫理が新しい倫理にとって代わってしまって唯一人で生きる孤立化へと追い込まれていっている。

ところがこうした背景の中で改めて科学はその無軌道に進歩した足跡を振り返って、科学と人間とを再考してみなければならない時代に突入して来ている。

当然、このことは老齡科学のなかでも医学の急速な発達、進歩によって、人間の社会生（寿命）に革命がおこり、長寿を可能としたが、老後をどう生きるかは、医科学はその専門分野ではないというであろうし、倫理学もまたそれには答えるすべを持っていないのが実状のようである。

ここに科学の今日の課題はひとの幸せに直接係わりを持つものでなくてはならない命題を露呈しはじめ来ている。とくに人間の幸せを学問的体系とする社会福祉は、一層の努力を傾けねばならないことは言うまでもない。ところで、人間の幸とは何か？これにアタックする方法も様々あるとおもわれるが、筆者はとくに老人福祉学のソルフエージュに当る基礎研究として情動の世界に着目して、老齡特有の固定的人格を形成するメカニズムを追求しようとしたものである。とりあえずその第一歩として情動の動きが何によるのか、どう動くのか、に関心をしばって今回の報告をしたのであるが、人間の死滅の問題・身心の病気の問題、それに人間関係の問題などが常識的ではあるが、情動性の安定を欠く問題であることがはっきりしてきた。

そこで、最早人間科学はこれを避けて通ることは出来なくなったと言えよう。とくに人間とともに生きる倫理を失ってしまった今日、なおアリストテレスの古典的人間存在の規定である社会的存在者としての人類はその王座を君臨しているのだろうかとおもう。

